

日本人学生と留学生の合同授業の取り組み

- 教員養成大学で行った授業の実践報告 -

宮城教育大学准教授 高橋 亜紀子

TAKAHASHI Akiko

キーワード：多文化教育、合同授業、国際理解教育

1. グローバル化が進む学校現場

日本の学校現場ではグローバル化が急速に進んでいる。2020年の東京オリンピックを見据え、小学校における英語教育の拡充強化が話題になっているほか、日本語を母語としない児童生徒に対する指導の必要性も増している。外国人児童生徒を受け入れることにより多文化理解の促進も急務である。

文部科学省の教職課程の質保証等に関するワーキンググループは、世界で活躍できる人材を育成するため、英語教員だけでなく全教員がグローバルなものの見方や考え方を身に付ける必要があると指摘している。

2. 宮城教育大学における取り組み

そのような教員を養成するため、宮城教育大学では、現在3つの取り組みを行っている。

(1) 協定校への交換留学

本学が連携する9カ国12の大学や研究機関に半年から1年間学生を派遣するもので、毎年5～6名が留学している。

(2) 長期休暇を利用した短期留学

「海外総合演習」という講義を全学生向けに開講し、オーストラリアや台湾、韓国などの協定校を訪問し、語学研修や学生交流を行っている。講義以外にも、中学生の海外研修をサポートするプログラム、海外の小学校で教育実習を行うプログラム、英語教育を学ぶプログラムなどがあり、それぞれの参加者は5～15名程度となっている。短期留学は1週間～3週間程度であるため、参加しやすく、大学主催という安心感もあり、学生には魅力的なプログラムとなっている。

(3) 学内での留学生との交流

本学の学生が留学生と同じ講義を受ける、留学生のチューターを担当する、留学生との交流サークルに参加することなどで交流を進めている。

以上のような取り組みを行っているが、(3)については、留学生と接する機会があるのはごく一部の学生に限られているのが現状である。留学生と日本人学生との交流を促進していくことは留学生教育を担当する教員の大きな役割ではないかと考える。

本稿では、「多文化教育入門」という講義の中で行った、留学生との交流を促進する活動を紹介し、日本人学生がどのようなことを学んでいたのかについて考察する。

3. 「多文化教育入門」の概要

本学には現代的課題科目群という独自のカリキュラムがある。これは、教育現場で求められながらも、従来の教科や学問分野に収まりきれない現代的な諸課題について学ぶための科目である。所属するコースや専攻の専門分野のほかに、もうひとつの専門分野を身に付けたり、自分の専門分野について異なる角度から総合的な見方を獲得することを目指し、9つの科目群から1つ選択する。各科目群の定員は約30名である。このカリキュラムは平成19年度から実施され、平成25年度に再改編された。

「多文化教育」はこの科目群の1つで、国際理解教育に関わる総合学習や交流行事を企画立案できる教員、外国籍児童生徒や帰国子女の指導ができる教員、日本人学校や途上国など海外の教育現場で活躍できる教員を育てることを目的としている。

今回紹介する「多文化教育入門」は、「多文化教育」の導入に当たる講義である。内容は(1)オリエンテーション、(2)学校現場での国際理解教育、(3)外国人児童生徒教育の現状、(4)行政の立場から考える国際交流、(5)世界の宗教、(6)地域の国際化の現状、(7)開発教育と国際理解教育、(8)世界の学校教育事情、(9)文化とは何か、(10)多文化共生社会を考える、(11)グループ発表、である。今回は(2)について実例を示したい。

4. 「学校現場での国際理解教育」の実践報告

4. 1. 課題意識

平成19年度から始まったこの授業では、本学の留学生と小学生との国際交流活動の実践報告を中心に行っていたが、受講者から「私が小学生の時はこのような機会はなかったのでうらやましい」「私が小学校の頃は外国の人と交流した経験がなく、私も異文化にふれてみたかった」などの漠然とした感想しか得られなかった。そこで、留学生と受講者が実際に交流する機会を持たないかと考え、平成23年度から留学生を招いて国の紹介をしてもらう活動を取り入れたところ、受講者から「文化の全く違うところの出身の人と交流できるのは新鮮だった」「留学生が思ったより日本語が上手で驚いた」など、活動が受講者にとって新鮮で印象的であることが分かった。しかし、「一方的に留学生の話聞くだけでなく、日本についても話したいと思った」というコメントもあり、留学生と日本人学生の双方向の交流が必要だと感じるようになった。

また、地域貢献として行っている「留学生を活用した学校現場での国際理解教育活動支援」に携わる中で、現場の多くの教員が英語圏以外の留学生に興味がない、活動に留学生を呼ぶことが目的になっているなど、教員側の意識に疑問を感じるようになった。同時に、教員に留学生等との交流経験がないこともわかってきた。

国際理解教育活動には、教員の意識や考え方が反映される。そのため、本学の学生には、留学生と交流するという生きた体験を積んでもらい、そこで感じたり学んだりしたことを将来教員になったときに生かしてもらうことが重要なのではないかと考え、実践を行った。

4. 2. 受講者とその実態

平成 25 年度の受講者は日本人学生 29 名、留学生 7 名の計 36 名である。日本人学生は 1 年生、留学生は台湾と中国からの交換留学生である。授業開始時に、受講者の実態やニーズに関する調査を行った。回答者は留学生を除く 27 名である。

その結果、(1)「留学生などと交流した経験があるか」については、小学校の時に経験 6 名、中学校の時に経験 1 名、高校の時に経験 3 名、なし 15 名と、経験したことがない学生がほとんどであった。(2)「留学生と学内で話す機会があるか」については、よくある 0 名、ときどき 3 名、あまりない 13 名、ほとんどない 11 名となり、留学生と接点のある学生は皆無に近い結果となった。(3)「留学生や外国の人と学外で話す機会があるか」については、よくある 0 名、ときどき 8 名、あまりない 7 名、ぜんぜんない 12 名と、こちらも機会がない学生がほとんどであった。(4)「留学生と友達になりたいか」については、27 名全員がはいと回答した。

(5)「海外渡航歴があるか」については、ある 9 名、なし 21 名で、あると回答した学生のうち、中高生で行ったのが 3 名、それ以外は子どもの頃の家族旅行だった。

(6)「自分の視野を広めるために大学時代にぜひやってみたいことは何か」については、留学 8 名、外国旅行 13 名、外国人や外国の文化に触れたい 6 名、となった。(7)「この授業で特に学びたいことは何か」では、外国人とのコミュニケーションの方法 12 名、外国の文化 10 名、外国の教育 3 名、外国人児童生徒の教育 2 名、であった。

以上より、多くの受講者が留学生との交流経験が小中高の段階でも無く、大学でも皆無に近いことがわかった。また、受講者の大半は海外渡航歴がなく、大学生のうちに留学や海外へ行きたいと望んでいること、外国人とのコミュニケーションの方法を学びたいと思っていることが分かった。この講義の受講者は海外に強い興味・関心を持ってはいるが、外国の人との接点はほとんどないことが浮き彫りになった。

4. 3. 交流会の企画と実施

「学校現場での国際理解教育」を「留学生との交流会を実施しよう」とし、交流会の企画に 1 コマ、交流会の実施に 1 コマ、計 2 コマ分を当てた。

交流会の企画では、「留学生を招いて、50 分間の交流会を行う。留学生は 8 名で、各グループに 1 名ずつ入る。留学生の自己紹介文を読み、グループで留学生をどのように迎えるのか、どのような活動をするのか、留学生に聞きたいことや留学生に紹介したいことなどを考え、交流会を企画しよう」と指示した。特に、留学生から一方的に話を聞くだけではなく、日本人学生側からも何かを伝える、双方向の活動を心掛けてもらうことにした。留学生はミャンマー 1 名、中国 3 名、台湾 4 名で、交流会の当日に来てもらうようにした。受講者は留学生の自己紹介文からどのような人が来るのかを想像しながら、国や言語、文化などを調べるとともに、具体的な活動内容について話し合った。計画段階では、自己紹介、留学生への質問、仙台や東北の紹介、折り紙、ゲーム、アニメなどが出た。一方、留学生には自己紹介や国の紹介などを準備してくるように伝えた。

交流会当日に留学生 1 名が欠席したため、7 つのグループにした。各グループは、机や椅子を移動して留学生を真ん中に迎え入れ、和やかな雰囲気交流会を始め、ど

のグループも大変楽しそうに活動している様子が見られた。

7つのグループが実際に行った活動は、(1)ミャンマーグループが留学生による自国の紹介、留学生への質問、折り紙、(2)中国1グループが留学生による地元紹介と自分たちの地元紹介、(3)中国2グループが留学生による自己紹介、留学生への質問、



交流会の様子

(4)中国3グループが留学生による中国の紹介、貨幣価値、食べ物などの話題、(5)台湾1グループがお互いの自己紹介、日本生活についての感想、(6)台湾2グループが自己紹介、留学生による自国の紹介、(7)台湾3グループが食文化や言葉、生活、スポーツなどの相違点について留学生に質問、である。

交流会後に、受講者に交流会の振り返りシートを配布し、翌週に回収した。

4. 4. 成果と問題点

4. 4. 1. 交流前の心理

受講者の回答のうち、文化に触れられる機会なので楽しみ、このような機会はめったにないので楽しみ、留学生の国について全然分からないのでわくわくする、異文化だからこそその刺激が得られるのでわくわくする、などの交流を期待するものは予想に反してごくわずかだった。

反対に、不安と回答したものが圧倒的に多かった。不安の要素として、日本語が通じるかどうか、コミュニケーションが取れるかどうか、自分の伝えたいことが伝わるかどうか、空気が気まづくならないかどうか、50分も場が持つかどうか、何を話せばいいのか、準備段階で自分たちが予想以上に日本の事を分かっていない、などが挙げられた。同様に、緊張する、乗り気ではないなどの回答もあった。それ以外に、台湾は遠い国で何か隔たりがあるような不安を感じる、などがあった。

一方で、このような機会はないのでできるだけ交流したいという気持ちと緊張する気持ちがあるなど、期待と不安とが入り混じった心理の受講者もいた。

以上のように、外国人との交流やコミュニケーション方法を学びたいという意欲のある受講者であっても、いざ交流となると、期待よりも、日本語でコミュニケーションがとれるのか、何を話せばよいのかといった不安のほうが大きいことが分かった。

4. 4. 2. 交流後の気付き

受講者の気付きを項目にまとめたものを紹介する。

○交流の楽しさ

- ・ミャンマーについての知識が浅く、不安も多かったが、いざ話してみると本当に楽しく会話でき、国際交流のすばらしさを感じた。
- ・実際に話しはじめてみると楽しくて時間を忘れてしまった。話したいことがどん

どんでてきて時間が足りなかった。この経験を生かしてもっと交流していきたい。

○コミュニケーションに関する気づき

- ・今回の交流で一番印象的だったのが、留学生の日本語の上手さだ。今回交流した留学生は日本に来たばかりだというのに、私たちの言っていることをすべて理解できていて、質問にもたくさん答えてくれた。
- ・留学生が日本語を話すのに必死で焦っていたのが分かったので、楽しくリラックスして話せる雰囲気を作った。ゆっくり日本語を話す、紙に書いて分かりやすく伝える努力もした。言葉の壁は大きいと感じた。
- ・言葉が分からなくても身振り手振りで話が伝わるのはすごいと思ったし、英語が結構通じると思ったので英語をしっかり学びたいと思った。

○文化の類似点と相違点への気づき

- ・自分が想像していたよりも、生活という点においては類似することが多くあり、非常に強い親近感が湧き、台湾についてもっと知りたくなった。
- ・距離的には日本と近い国なのだが、実際には様々な文化の違いがあり、それらを知ることは面白かった。異文化を理解し、学ぼうとする姿勢が大切だと思った。

○視野の広がり

- ・普段はあまり直接話したことがない留学生と関わる機会を通じて、楽しむだけでなく、自分の他国に関する視野が広がった。
- ・多文化を知り、自分の視野が広がるような感じがして嬉しかった。
- ・このような形式の他の国や地域との交流は、自分たちの持つイメージや偏見からの脱却を図ることのできるものだと思う。

○日本についての再認識

- ・日本の中には気づかないような日本の良いところを知ることができて日本の事がより好きになった。礼儀正しさや公共施設のきれいさなども日々当たり前になっていることが、実は世界から見たら恵まれているということが分かった。
- ・お互いの国のことを知ることができたことに加え、自分の国の事、地元のことも改めて知ることができ、良い機会になった。
- ・日本や仙台について聞かれたとき、意外と自分たちが知らないことが多いと思った。もっと自分たちの国について住んでいるところについて関心を持ちたい。
- ・日本の良い所を伝えられるように日本文化を学ばなければいけないと思った。

○留学への刺激

- ・私もいつか留学したいと考えているので、今回の交流はとても勉強になった。
- ・日本にきてからの生活についての話を聞き、外国に留学するのは大変なことがたくさんあるが、私もそのような経験をしたかった。
- ・台湾の学生のことや留学生自身の勉強に対する姿勢の話を聞き良い刺激を受けた。自分の勉強に対する考え方の甘さや努力の足りなさを反省し、頑張ろうと思った。

○自分の世界を広げようという意欲

- ・自分の知らないほかの国や日本のことについてもっと知りたい。
- ・留学生に積極的に話しかけて友達になりたい。

以上、受講者の気づきから、交流前の不安が消え、楽しく交流ができていたことが分かった。最も不安な要素だったコミュニケーションについては、日本語で交流できたので問題はなかったようである。また、日本語でのコミュニケーションが上手いかわからない場合でも、ゆっくり話したりジェスチャーを交えたりすることで対処していた。その他には、双方の文化の類似点・相違点の気づきと視野の広がりが見られた。文化の違いに目が行きがちだが、類似点が発見できたことで相手への親しみを感じたようだ。さらに、外から見た日本の話を知ることによって、日本や自分自身についても客観的に捉えるきっかけにもなっていた。同時に、日本や地元についての理解を深める、自分自身を高める、留学に向けて取り組む、自分の世界を広げる、などにもつながった。

このようなたった1度の交流でも、受講者は、不安だったコミュニケーションの壁を乗り越え、留学生との心理的な距離を縮め、多くのことに気づき、留学生との交流は楽しいものだと感じる事ができた。また、今後の新たな出会いや交流にも意欲的な態度を示している。今回の生きた体験は、教員となって、子どもたちの期待や不安を受け止め、留学生や地域の外国の人々との出会いの場を作っていくことにも活かされるのではないだろうか。

最後に、留学生の感想を紹介する。

- ・今回の交流はとても楽しかったです。グループの人は優しく、地元のことを紹介するポスターも作ってくれてとても嬉しかったです。私の地元の写真をみんなに見せたら、みんなが驚いていました。交流して友だちができて良かったです。
- ・私の日本語はまだ下手ですが、日本人の皆さんがたくさん話しかけてくれたり、仙台のことをいろいろ教えてくれたりして、最初の不安は徐々に消えていきました。また、交流しているときに私が感じたのは「日本語」というのは、書いたり、試験のために勉強するのではなく、聞いたり、話したり、人とコミュニケーションをとるための言語という道具であり、学ぶだけではなく実践として使わなければ意味がないということでした。今回の交流のおかげで、見識を広げることができ、非常に良い経験となりました。



自国の紹介をする留学生

留学生の感想から、日本人学生と同様に、交流前には不安や心配を抱えていても、交流してみると楽しいと感じていることが分かった。また、日本語学習を捉え直すきっかけになる、自分や自国のことを日本人に伝えられたという自信と充実感も得られるなどの効果も見られた。

おわりに

本稿では、平成25年度の「多文化教育入門」の講義の一部「学校現場と国際理解教育」における日本人学生と留学生との交流会の実施報告をするとともに、参加者の学びと交流会の意義について考察を行った。

その結果、日本人学生は交流前に多くの不安を感じていたが、交流が始まるとともにその不安が解消され、楽しみながら多くのことを学んでいた。留学生も同様の結果が見られた。たとえ一度であっても自らが体験することに意義があると言えよう。

今後も、日本人学生と留学生とが共に学べるように、双方の交流の場を学内でも積極的に作っていきたいと考えている。

参考文献

文部科学省・教職課程の質の保証等に関するワーキンググループ（第5回）配付資料（2013）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/093_1/shiryo/attach/1339466.htm（2014年3月2日閲覧）